

## 妊婦の体を儀式の環境にすること —— 儀礼研究から見る江戸時代の妊娠 ——

ウィリアム・リンゼイ\*

### はじめに

江戸時代後期には賀川流等で婦人科の革命が導かれたと言われる。この新しい研究は蘭学の影響だけではなく、日本人の婦人科の医者が自ら学ぶことにより胎内や胎児の成長や胎児型姿位を正確に描写したり検査したりしたことで始まった<sup>(1)</sup>。これは現代日本の婦人科を生みだした先駆的な医学である。一方、江戸時代では妊娠は伝統的な習慣と知識の基礎を通じて体験された。このような習慣と知識をまとめて伝えているのは、儒教の教育を受けた医者によってしばしば書かれた女訓といったジャンルである。具体的な例として挙げられるのは、伊藤仁斎の弟子である苗村丈伯（雅号は艸田寸木子一そうでんただきし）の1692年に出版された『女重宝記』である。苗村の女訓のなかで妊娠について描いたものはただ一部のみであるが、女性に関する色々な体験と関心を記述する『女重宝記』は五つの巻に分かれる。その内容は様々で、話題は武家礼法を伝える小笠原流に基づいた結婚式や物の包み方から正しい行為の重要性や化粧、ヘアケアにまで及ぶ。この本の内容は、娘を持ち上昇指向を持っていた家族を対象としていた。苗村等の著作に書かれたこのような種類の女訓は、娘に対し社会的に上流階層の生き方の窓を開ける手引書の役割を果たした。このように女訓は江戸時代、にかけて庶民の生活に武家の価値や作法、儀式を紹介し、徐々に日本の生活の侍化 (*samurization*) の基礎を築くことに影響を与えたと言える。この生き方の基本原理は、正しさである。つまり、手引書としての女訓の勧告に従って女性たちは正しい知識を得、正しい儀礼を習って行い、正しい振る舞いをし、その理想を手本とすることによって自分のライフスタイルをつくりあげ自分の人生を改善できる。これが女訓が創作された主要な理由である。女訓によって促進される生き方の中では、妊娠についてもその正しさの意識が表現された。

正しさの感覚を引き起こそうとすると宗教的な意識が生まれる。宗教の一つの目的が信者にとって正しく整頓した環境で、説明できない問題も合体できない現象もない世界を作ろうとすることである。儀式はこの目的に必要なものである。儀式が行われるのは、その時間と空間という環境の中に、全ての人生の要素を統制して、あるべき状態にしようとするのである。つまり、儀式を行う活動は理想な環境を作る創作活動である。儀式で作った環境の中で、全ての実在するべき事が実在する理由を持ったり、実在しないべき事や失敗や目的のないことが、起こるのを最終的にそれ自体存在のないこととして説明できたりするものである<sup>(2)</sup>。このように江戸時代の妊娠に関する実行や慣習という胎教には儀式の種類が見えると思う。医療がまだ進歩しなくて妊婦の死

---

\*カンザス大学宗教学部助教授・神奈川大学外国人研究員

亡率が高い時代では胎教は妊婦の体に1) 安全な状況を作るつもりだった, 2) どうして難産や死が起こるのかを理解しようとする目的をもっていった。そこで, 苗村等によって勧められた胎教は, 安産の可能性を増大させたり, 難産についての不変の脅威を解説したりするために妊婦の体を理想的な環境にしようとする儀式として機能したと言えるだろう。苗村の『女重宝記』等を見ることにより, 妊娠に関する三つの種類の慣習に焦点を合わせて考察したい。それらは, 腹帯と五か月目, 食物, 難産に対する治療についてである。

## 腹帯と五か月目

苗村は腹帯の発祥が神功皇后の妊娠に遡ると考えた。彼によると, 三国時代の韓国で陸軍を率いた神功は, 応神天皇である胎児が恐れないように膨れた腹に帯を結んで指揮を続け, 後に応神を安らかに産んだ。その事件以来, 日本人の女性が子を孕むと腹に帯をまくという習慣が行われているというのを苗村は力説した<sup>(3)</sup>。しかし, 実際には苗村が述べるような事件は『古事記』にも『日本書紀』にも記されていない。記されているのは, 神功が応神の出産を延期するために石を取ってさまざまに使った(臍に入れる『日本書紀』, 腰の回りに結ぶ『古事記』)という伝説である。ところが, 神功が最初に帯を用いたことを語る伝説は正式の神話に記されずとも, 他の起原から普及していったそうである。例えば, 出産や結婚等で祝い事を行う一種の巫女である桂女は, 苗村の述べるような神功伝説に基づいて独特の帯の形の被り物の由来を作ったという<sup>(4)</sup>。苗村にせよ桂女にせよ, 腹帯の習慣を皇帝の伝説に結び付けていたのは明らかに意義があったとされることを暗示する。ただし, 儀式の実行という立場から見ると, 腹帯の根本的な意義は女性を包むことであると言えるかもしれない。日本で物を包装したり結んだりするのは, 言うまでもなくどこにも数えきれない例がある。例えば, 犯罪現場を青いシートで囲うことやお金をのし袋に入れること, 買った本をカバーで包むこと, お葬式が行われる部屋の白黒の縞の帳などである。やはり, 日本宗教の典型的な例は注連縄で結ばれる石や木であろう。人類学者のジョイ・ヘンドリー(Joy Hendry)によると, 日本文化では物を包装する傾向は包んだ物そのものにもまして包装するという行ないが意味深い<sup>(5)</sup>。つまり, 物を包装すると物の質が変わって意義が満ちるモノに成り, 人間は物を取って包装し特別の地位をもたない物から包装した人間にとって意味深長なモノへと変える。その意味は色々で, 丁寧さやマナー, 尊重, 精神力を指揮するといったようなことを含む。ヘンドリーは, 日本宗教を研究する学者は物自体よりむしろ人間によって包装されるモノに焦点を合わせるべきだと述べている。この点に注目すると, 神聖という性質は物の中に存在するのではなくて人間によって作られたモノに置かれることが分かる。このように, 日本宗教の研究者は, 包装する力には神聖を生産する力もあるという事実を見落としてはならないとヘンドリーは忠告する。

上で書いたように, 『女重宝記』には物の包み方を記した箇所がある<sup>(6)</sup>。その箇所を見るとヘンドリーの強調したことを考えさせられるだろう。その部分には文章はほとんどないが, 説明的な言葉の代わりに正しく包まれた物の絵が沢山あり, 様々なお祝い物も通常の物も描写される。そ

それぞれの品目の使用も機能も言葉では決して説明されないので、その部分の重点は絵を通じて文化的な行ないとしての包み方が物に重要性を与えることを表現することなのかもしれない。妊婦に腹帯を結ぶことにはそのような意味もあると言える。五か月目になってだんだん膨れていく腹を包むと、妊娠は妊婦の集団にとって決定的な関心事になった。最初の五か月間で胎児も女性の体も変わっていくのに、五か月目になったら帯を結ぶという習慣的な実行により、妊娠を自然現象から非常に重要な社会現象にしたのである。ところで、勿論、五か月前に女性の妊娠の状況は分かっていたのだが、例えば、苗村は正しく診断するために普通の病気とつわりを区別できるように色々な方法を挙げている。一つの例はセンキウを粉末にしてヨモギ（苗村は艾葉モグサと呼んでいる）と煮て汁にする。女性はお腹がすいている時にこれを飲む。さらに女性のお腹が動くなら妊娠のつわりで、さらに動かないなら病気だという診断の方法もある。

確認される社会的な現象としての妊娠を象徴する腹帯と対照的に、吉原や新町といった遊郭では、腹帯は不在の象徴であったと言える。遊女が妊娠すると、妓楼の親方が遊女に墮胎させない時は、腹帯を結ばずに子を産ませて養子にさせるという習慣が時おり実施されていた。すなわち、腹帯の使用を否定することによって、遊女の集団である妓楼や妓楼の頭は遊女の妊娠を集団の関心事として否定した。遊郭の中で妊娠は社会現象では決してなく、それは川柳でも「腹帯をせず産んでは江戸へ出し」と表現されている<sup>(7)</sup>。やはり江戸へ出されるのは望まれない赤子である。

腹帯は妊娠の社会的な事実だけではなく、胎児が形成され成長しはじめる事実も承認する。妊娠の五か月目で胎児は堅固なモノになってくるという観念が広範囲にわたったが、これは流産が起こる恐れが主として終わったと考えられるためである。具体的な例を挙げると、江戸時代、東北に住む農民は五か月前に流産で死んだ胎児を「死体」に含めることはなかったが、五か月目から後に死んだ胎児を「死体」と呼ぶ習慣があったという<sup>(8)</sup>。五か月目と胎児が形成されることの繋がりを示すもう一つの例は、仏教に影響された民俗の思想を反映していたことである。『女重宝記』の妊娠の巻に、苗村は広く普及した十枚の並んだ絵を掲載した<sup>(9)</sup>。その絵（1図と2図を参照）は不動明王から阿弥陀仏までの仏教化した十王で、要するに密教の十三仏の最初の十仏である。妊娠の月ごとに一仏が胎児とともに現れて胎児の身になりきって守護するのを描写した十の絵は次のように分割される：一か月目と不動、二か月目と釈迦、三か月目と文殊、四か月目と普賢、五か月目と地藏、六か月目と弥勒、七か月目と薬師、八か月目と観音、九か月目と勢至、十か月目と阿弥陀である。一か月目から四か月目までは胎児を無形で仏具として描いているが、ついに五か月目になると胎児は最後に人間の形になる。その無形の状態について、「白露ごとし」と「桃の花ごとし」と苗村は書いている<sup>(10)</sup>。したがって、無形の先祖がいるあの世へ、魂を時の経過とともに案内し保守する仏は、有形の人間がいるこの世へ胎児を十か月の間に案内し保守する仏と同じである。この世への道という由々しき時間は、胎児、人間の形になる五か月目である。無形と有形のバランスのなかにいる胎児の運命は地藏の保護のもとに、一方で流産や墮胎や間引で死の方に落ちてあの世に戻りもう一回産まれる機会を待ち、他方では命の方に落ちてこの世で産まれ育てられる機会を持つということが出来る。



1 図 『女重宝記』 から



2 図 『女重宝記』 から

胎内十月の図というジャンルに属すこの十枚の絵のシリーズは起原が複雑で、この記事に関する私が指摘できる範囲を越えるが、これは最初に中世の思想の様々な流れ（本地垂迹、本覚思想、神道等）に根付いて形成され江戸時代に及び、絵を用いて説教する巫女や絵入り女訓を通じて俗化されてしまったという<sup>(11)</sup>。俗化されて絵が影響を受けた江戸時代の妊娠の立場は川柳にも読まれている。例えば、「中条も仏具の内は壊されず」の川柳は、中条という中絶の専門家の世界にもその絵が影響を与えたことを指している<sup>(12)</sup>。遊女が中絶をするという歌川豊国によって描かれた絵を見ると（三谷によって復元された3図を参照）、川柳の意味と江戸時代の中絶の実像が分かる

だろう。いうまでもなく、江戸時代では中絶をするというのは非常に危ないものであったが、妊婦の健康のために無事に中絶するには胎児の体がある程度の大きさになってはいたはずである。したがって、五か月目頃に胎児の体が大きくなり、矢のように細くて鋭い物の先端に水銀が入った混合物を塗り、それを直接子宮に挿入し、胎児の体を突いて殺すという中絶の方法が上述の川柳と3図に暗示されている<sup>(13)</sup>。さらにこれは、人間の形になることが受胎時に始まるのではなくて受胎の数か月後から始まるという東北の農民の考え方の論理に類似している。



3図 歌川豊国『廓の明け暮れ』から三谷一馬の復元

五か月目の意義の論理に従えど、苗村にとって五か月目は性が定まる月であるから、その時期から胎児の性を判別する方法があった。例えば、もしも妊婦が辛いものを食べたがったら男の子で、甘いものを好むようになったら女の子だとされた。1692年に出版された『婦人寿草』で、香月牛山著はもう一つの方法を勧める。南方に向かう妊婦の後ろから突然叫んで、もしも彼女が右へ向いたら女の子で、左へ向いたら男の子だとされた<sup>(14)</sup>。ところで、関心を引いたのは、性が受胎時ではなくて後で決まった場合、定まる前に胎児の性を変えるか、それとも男性になる可能性を高くするかという方法についてであった。そのことについては苗村は何も書いておらず、香月は信じていないものの、ともかく次のような例を示す。三か月目の後（彼は苗村と違って三か月目が性が決まる時間という推測を進めていた）、男の子が欲しいが女の子の胎児を孕んだと思っている女性が男装して井戸のまわりを三回歩き回りながら呪いの言葉をとなえる<sup>(15)</sup>。さらに寺島良案は、1712年の『和漢三才圖會』で色々な例を挙げている。例えば、雄鶏の肉を雌鳥より多く食べると妊婦が陽性を増加させ男性胎児にしようする習慣などである。もう一つは、妊婦が毎日休

む部屋の下に斧や刃を土に押し残すことで、その習慣が面白いのはそれが女性に知らせずに行われることである<sup>(16)</sup>。苗村や香月のような医者は性を変えようとする行ないを否定したが、こうした習慣は胎児が三か月間あるいは五か月間無形モノであるという論理によく合うとは言えないか、あるいは今や無形なので後に何にでもなる可能性があるという訳である。

いずれにしてもその慣習が成し遂げようとする目的とは、つまりできるだけ妊娠の良い結果をもたらすために理想な環境を作って（男装をすること、陽性を増やすこと、斧を置くことなど）、人生の要素（この場合には、女の子より男の子を孕むほうを好むということ）をあるべき状態にすることで、腹帯を結ぶのも同じである。帯を結ぶのは、良い結果を生み出すために妊婦と胎児の両方を理想的な環境にすることである。その環境の中でこそ、胎児が存在を持ち人間の形になる事実を妊婦の集団が認識したり、胎内で落ち着かせ静かにさせたりすることができた。難産を防ぐこと、安産を励ますこと、母の健康を守ることなどという人生の要素をあるべき状態にしようとする、その状態に関しては帯の渡し方も大切なことである。例えば、帯を渡す儀式は色々で、一つはゆくゆくは子を分娩させる産婆が妊婦に腹帯を渡すこと、ほかには妊婦が実家から安全靈験で有名な寺で手に入れた帯を貰うこと、もう一つには子を多く産んだ女が腹帯を渡すことも行われた。最後は苗村が勧めた儀式である<sup>(17)</sup>。そのうえ渡す儀式の日も重要なことだと考えられた。苗村は帯の吉日の間でもやはり主として戌がついた日を勧めた苗村は、決して理由を説明してくれないが、犬が安産で子を多く産む動物だという通俗的な観念を反映していただろう。彼はその吉日に腹帯を結びはじめると難産の恐れがなくなることをはっきり述べた後で他の妊娠問題を取りあげた。

## 食物

そのような問題の一つは妊婦が食べた方がよい食べ物か食べない方がよい食べ物かという問題である。障害がなく元気な子を易しく産めるように、正しくない食物を避けるのは妊婦の体を理想的な環境にする方法であった。苗村は医者として、役に立たない食物を食べてはいけないと忠告することを大切にされた。この面白い点は、女性が食べ物の組み合わせを食べることによって、子の健康や分娩の易しさという結果の良し悪しをはかる食合せに対する関心である。苗村は多数の例を挙げる<sup>(18)</sup>。例えば、鶏の卵と鮎または鯉を食べると子に湿疹のような皮膚の病が生じること、鶏の卵と塩乾魚を食べると瘡という出来物を病むこと、鶏と糯米を食べると子にサナダムシが寄生すること等である。難産の可能性を増進する食合せもあると思われる。鴨の卵と桑の実は逆子の出産を引き起こし、嘗味噌と豆の若葉は流産を刺激することである。ある種の食物が危険になることもあったという。生姜を食べると子に指の障害が起こり、くさひらというキノコは脳膜炎のような状況を生み、スッポンは子が短い首になり、蟹は胎児が横位になって分娩することになるという様々な例がある。

産まれた後、子が湿疹や瘡のような皮膚の病気にかかった場合、胎内にいる時から、それらにかかっていたというのは胎毒についてのよくある考え方である。例えば、江戸時代の母の日記に

は胎毒のせいで子の皮膚の病気が分かったという一節が時おりうかがえる<sup>(19)</sup>。胎毒の分かり方は現代の医療の学識ではずいぶん違っているが、民俗の学識ではそのような胎毒の論理は珍しくないものである。フア族(Hua)というニューギニアにおいて民族の食べ物と人間の体の関係は「流動性の現実」と述べられる。フア族を研究している人類学者のアンナ・メーズ(Anna Meigs)によると、フア族にとって体の健康や人の振る舞い、人格といったことは個人に独特の性質ではない。それどころか、それらは人間や食べ物、生物などの間で相互に連結した流れの中で展開するものである<sup>(20)</sup>。人生の中で何でも支配ができ何でも責任がとれる本当の個人は実は存在しない。相互に連結した流れの中で存在する人なので、絶えず様々な影響を受けてそのために人の健康の調子や倫理の成長や人生の質が形成される。その相互の連結の流れが「接触感染の経過」のように作動することを分かっているフア族は、消費する物によりどのような人になるのか、それらがどのような深い結果を引き起こすかを知っている。フア族の発想のように、苗村は食べ物が相互に連結した流れに重要な役割を果たすと考えた。食べ物はお腹が空いている時、食するものというよりも、むしろ妊婦の体と胎児の体を、女性の食物選択と子の人生の質を結びつけるものとして理解されていた。

このように、食物は身体の障害を起こすと共に性格の障害も起こす恐れがあると考えられた。次の例を苗村は説明した。もしも女性が雀を食べて同時に酒を飲むと、産まれた子が成長するにつれて淫乱な人になり色情の行為を恥じなくなる。まだ産まれない子に悪い将来をもたらす母の振る舞いという観念は珍しいことではなかっただろう。実例として、江戸時代に盛行した庚申待という祭祀を挙げたい。これは庚申信仰が顕著な祭事で、庚申講に参加する信者が徹夜をしてお経を唱和したり、奉納したり、清浄にしたりする。それらを通じて信者の罪を天の上帝に知らせないように、体の中にある三尸という三匹の虫が体から出るのを止めることができる祭事である。正しく祭事をするにより、信者は過去の罪の償いをする事ができた。ところが、神聖な夜なので、祭事中には睡眠や性交を忌まなければ罰を招いてしまう危険がある。例えば、性交して子ができた女性は、その子が将来犯罪に手をそめるかもしれないと彼女が活着している間中、苦勞や心配を積む<sup>(21)</sup>。

苗村は受胎する時間と場所が重要だと考えて例を挙げた。食合せの箇所を終えて、彼は性交して子ができてはいけない時間と場所の目録を作っている。大風、大雨、雷電、地震、仏神の供物台の前、聖像の前といったような時間と場所で受胎した場合、難産や産まれた子が若いうちに死ぬ恐れが起こる<sup>(22)</sup>。1650年に出版された『女鏡秘伝書』にも、性交を忌ませる嵐と仏神象の目録の記載がある<sup>(23)</sup>。ここで考えられる一つの問いは、どうして『女重宝記』の食物の箇所で、苗村は受胎する時間と空間の問題を掲載することにしたのか、ということである。掲載する理由ははっきりわからないけれども、両者には似たような儀式的な論理が示されていると言えないだろうか。つまり食物の禁忌も性交の禁忌も両方とも、してはいけない行為を強調して、女性が食べることにに関してか、あるいは性交に関して何時、何処で行なうかという選択と活動によって、自分の胎内に良い結果をもたらす環境にできるという論理を示している。

この論理を使って苗村は、無事な妊娠にも子の健康にもいい食物を多く勧めるが、それには大麥、アワ、黒豆、大根、ごぼう、イチゴ、人参、鯉、ウド、麩、烏賊等が含まれている。苗村はまた、悪い食物の表を作ったが、特定の病と特定の食物の表と違って、この表には決して病氣そのものが入っているわけではなく、ただ「よろしからぬ食物」と呼ばれる。それは梨、梅、杏、餅、蓮根、鳩、雀、こんにゃく、ドジョウ、川の魚、辛い物、臭い物等が含まれる<sup>(24)</sup>。さらに彼は、母乳の不足を防ぐのに役に立つ食物を挙げる。やはりミルク状のベビーフードがない時代には、乳母を雇う余裕がない女にとって乳不足の問題は深刻だった。古い絵馬には色々あり、乳房を握って桶に乳を多く流す女の視覚的なイメージは、乳不足の心配から仏神に祈禱していることを示す。苗村はその反対の問題にも目を向けて、乳房の乳が多すぎて腫れて痛みのある状況には、次の診療を与える。ネギの白根をおろして乳房に厚く塗り、紙をネギの下に敷き、それから焼いた石を布に包んだものを置く。この方法は体に汗をかかせて腫れと痛みを軽減するためのものだった<sup>(25)</sup>。

儀礼は多様な感性を示唆する。儀礼研究者 ロナルド・グライムズ (Ronald Grimes) は儀式的な活動を様々な「儀礼感性の形態」に分類している<sup>(26)</sup>。『女重宝記』の立場から、食物と妊娠の関係は少なくとも二つの感性を暗示する。一番目は「儀式化」で、グライムズ氏が *ritualization* と呼んでいる基本的な儀式の感性のことである。儀式化とは、人間を含めた動物が生物学上の衝動にパターンを与えるということである。本能にせよ習った社会的な行動にせよ、あるいは個人的な選択にせよ、動物や人間が食べたり、性交したり、伝達したり、感情を出したりする仕方は、しばしば無意識的な様式によって行われる。生きた人間という動物は、このような様式で儀式化を行うものと言える。日常生活の活動から密教やカトリック教の精巧な祭式まで、基礎の行動をパターン化させる傾向は儀式化の感性である。そう考えると儀式化は、儀式だけではなくて人生の暮らし方における建築用のブロックの種類のように考えられる。苗村は食物をただ考えずに食べられる物として考えるよりむしろ、大変気をつけて選ばれて食べられる対象として強調していた。彼は、悪い食物と良い食物を分別して良いのを選んだり悪いのを避けたりして、妊婦や胎児のために（赤子も子供も大人も）食べ方から正しい様式を作ってほしいという説明をした。この様式はエチケットや上品さに関するということよりも、体を守る安全さや健全な妊婦、子を保護することへと道を開くことで、結局は正しい母になるという建築用のブロックのようになっていると言える。

食物についての慎重な態度は二番目の儀礼感性を指す。これは「妖術」で、グライムズによって *magic* と呼ばれる。ある儀式は、信者によって行われると明白な結果をもたらすはずだと考えられている。要するに、儀式を行うとある状態が変わるという効果が生まれる。体から邪悪な靈魂を出させる儀式である悪魔払い、妖術の感性を代表する典型的な儀式であるが、実は色々な例があり、上に述べたように胎児の性を変える儀式である。真実の結果を生み出すとされる妖術の感性に対する他の考え方としては、初めから悪い状態が起こらないように行われる儀式も、同じく妖術の感性を示している。この場合は、生み出される結果は悪いことがもう起こらなくなることを示す。先に挙げたように、苗村は食べてはいけない食物と悪い結果について多く述べたが、そ



こには、その食物を食べなければ良い結果を起こすことができるという発想がある。例えば女性は生姜を食べると指の障害をもつ子を産む恐れがあるが、食べなければその障害の脅威はなく安心できる。蟹を食べなければ横位での分娩という難産がなく安心できる。雀を食べずに酒を飲まなければ、今なお胎内にいる子は将来墮落した大人にならず、安心できる。妖術の考え方から見て逆に言えば、産まれた子の指に障害がないときは、生姜を食べたことがないわけで、子が悪い人にならないということは、雀と酒を消費したことがなかったからだということになり、これらは妖術の感性を示している。さらに、グライムズは妖術の感性の根底に潜む感情は懸念だと考える。儀式の実践により実際の効果を生み出そうとする必要性は、江戸時代の妊娠がなかなか安全に統制できないという状況やそれらに伴う危ない体験を指す。さらにその懸念は子が肉体の健康に恵まれてほしいという願望だけではなく、子が精神の健康を持って倫理的な生活を過ごせるかどうかを心配することも指す。

このような妖術の感性に関する懸念は、江戸時代の医学の二面性を反映している。一つには医療がまだ進歩していないために直接、重病や難産という危険な状況を効果的に治療するのはとても難しかったということ。そして二つめには、そのような状況の中で、一番効果的なことは危険な状況をできるだけ避けようとする守りの姿勢であるということだ。苗村のように儒教をよく知る医者は、病気と危険を避ける方法として、意図的で慎重な行為に基づいた生活を送り、正しいライフスタイルを立てて、体にも心にも健康的で倫理的な人生を過ごすように、という養生の思想を主張した。上に述べたような食べた方がよい食べ物や食べない方がよい食べ物、性交するのに悪い空間と時間は、主張された養生の具体的な例である。体の健康を脅かす病気や人生の危険な状態といった観念に対する養生の第一の原則は、病まないように元気を保つことである。これとは異なっている現代の医療のアプローチでは、元気になるように病気を治すという傾向をもつ<sup>(7)</sup>。両者にはこうしたこの微妙な差が見受けられる。このように考えると、今日の日本人は病気になったり難産を克服したりできる、いわば医学上余裕のある進歩的な社会に住んでいるわけだが、そのような状態は、風邪や分娩で死んでしまう江戸時代の人たち比べると、もちろん実情がまったく違う。

### 難産に対する治療

江戸時代、子を孕む女性にとって、難産はしばしば命に関わる体験になりうるので難産を防ぐために医者は養生の思想に従って妊婦に元気をだすような振る舞いを忠告した。妊婦の体の観点から、その振る舞いは身持ちとして示される。身持ちは倫理的な行為を意味するけれども、もう一つの意味では子を妊娠する体を示す。この二つの意味は、とりわけ分娩の体験に両方とも作用する。つまり、身持ちの女は難産を避けるように身持ちの良い女としての所行をしなければならぬ。妊娠中に身持ちがよくないと、難産を招き自分の命や赤子の命を危険にさらす。苗村等にとって、この忠告は悪いことが全く然起らない医学上の理想郷を作ろうとするつもののものでなく、むしろ悪いことがどうして起こるかという問題や危険を解釈したり説明したりできる理

想的な環境を想像して身持ちを捉えようとするものだっただろう。このように妊婦が何を食べるか、あるいは、どこで何時性交するかなどという身持ちの選択は、難産が起こるかどうかに影響を与えるとされた。従って、妊婦が難産を負うのは無原則で偶然に悪い状況が起こるためというよりむしろ、女性と女性の世話をする人が妊娠中に儀式を十分に行わなかったせいだと考えられた。このように、妊娠に関する身持ちは完全に儀式の一つの重要な役割を果たしていると言える。儀式の実行として、妊婦の体に対する身持ちの力を信じて身持ちを行うことは、妊娠の体験にとって可能な全ての要素が、悪くても良くても起こっても起こらなくても、解釈できる環境を創造する。それゆえに苗村は様々な難産の種類を述べる時、難産の基礎的な理由を説明して、「難産するといふは懐妊のとき身もちあしく」と記した<sup>(28)</sup>。つまり難産は身持ちが悪いせいで、安産は身持ちが良いためなのである。妖術の感性の立場から他の表現で言えば、身持ちという儀式を不注意に行うと難産が予期されるはずだが、慎重に行えば安産（苗村によって、平屋と呼ばれる）が予期されるはずである。

上の面白い点は、苗村の言葉の論理が宗教的な論理性を示していることだ。すなわち、脅威となる要素が現れることはめったに宗教的な論理に対する疑問をもたらしませんが、その代わりにそのような要素に対しては正当化する方法がある、という想定である。それは理想的で神聖な力である。例えば、キリスト教の信者は人生に起こる幸運や成功を神様によって恵まれることとして信じるが、不幸や失敗は、神様に挑戦をつきつけられることや正當的に罰を受けることとして信じる。最近の例として、あるカトリックの神父は、2004年十二月のスマトラ沖の津波について、神は津波が起こった理由に関わっていないものの、津波に対する反応として人間が人間を助けることに関しては、関わっていると言ったそうである。このようなことを考えると、身持ちについての苗村の言葉は宗教的な考え方に似ている。脅威となる対象（妊娠の場合は難産）が出現しても養生の想定に基づいた身持ちの実行を促すことには疑いの余地がなく、余地があるかなしかは身持ちが悪いか良いかという問題ではない。

尚、脅威となる要素として難産を説明でき、また正当化できても、起こった場合には危機を回避するために出来るだけ治療しなければならない。苗村によれば、難産を手当てするさいに第一のことは、医者や産婆が母親を落ち着かせることである。苗村は穩婆（取上げ婆）と呼ばれる産婆を妊娠専門家として医者と等しいものとする。この点で、彼は時代の人である自分を示した。つまり徳川時代の後期には、産婆という専門職は婦人科を進歩させようとする賀川流等に批判され、他の迷信や時代遅れのことを実行するものとされた。しかし、これ以前には出産界では医者のようなレベルにおいて産婆は良い評判を持っていた。但し、江戸時代には子の人生だけで産婆の役割を計れなかった。子を分娩させる役割だけではなく、地方では産婆が子に象徴的な関係をうち建てる慣習があった。例えば、最初に子を着せる服を縫い合わせることや子に名付けをすることである<sup>(29)</sup>。苗村にとって、医者でも産婆でも難産を負う女の世話をする人にとって一番の重要な資格は熟練した人であるということだった。そのような人が難産を治療する技術をよく知っていることは極めて必要なことである。

苗村は様々な技術について述べるが、簡単な技術として、タツノオトシゴ、寶貝と熊の手が含まれ、タツノオトシゴを海馬と、寶貝を子安貝と呼ぶ。『女重宝記』に海馬の絵と子安貝の絵が掲載されているが、苗村によればそれらが掲載される理由とは、その物を手に入れる時に間違えないように絵を見て確かめられることである<sup>(30)</sup>。海馬は蝦蛄に似るが子安貝は他の貝に似る。難産を防ぐ力がある海馬は、雄が育児囊の中で雌によって入れられた卵を孵化させる魚とされ、分娩する女性が海馬を手で掴むと産みやすくするための力がつくとされた。苗村は「海馬を産婦の手のうちににぎらすれば難産なしといへり」と書いた。子安貝は小さいカップとして使い、妊婦の世話をする人が薬を入れて女性に服用させる方法がとられた。この薬ははやめ（催生）と呼ばれる早め薬で色々な種類があるが、処方されると女性に早く安く分娩をさせる薬になる。「貝にははやめを入れてのめば平産するなり」と苗村は述べている<sup>(31)</sup>。最後に、切り落とした熊の手を持つ産婆は子を孕んだ女性の腹を熊の手で何度も優しく撫で下ろして子を易しく産ませるといふ呪いのような技術をつかう。この技術のために産婆は、批判的に熊手婆と言われるようになった。

複雑な技術もある。苗村はもう一度読者に思い出させるように、悪い身持ちのせいで逆子出産や横産という難産に迫られる時に「まじなひ」と呼ばれるその技術が使用されることがあるとして、次のように述べた。妊婦の世話をする人は伊勢大神宮の伊勢という文字を紙に書き、効果に対し深い信念を持って、水を母親に飲ませると子が容易に産まれる。苗村が言うように、技術が難産の脅威にさらされる体に強く作用できる理由は「神力」を所有する文字にある。現在のように、江戸時代でも伊勢大神宮に巡礼して安産のお守りを手入れるのは大事なことだとされ、その上に宮の名前の文字も可能な神力を持つとされた。苗村によれば、伊と勢という文字を五つの漢字に分解し、そして母を世話する人が次のように「人・伊・生・丸・力」という文字を書いて作り、「ひと・これ・むまるゝは・まるが・ちから」という意味深い言葉を読んだ。産まれる赤子の理想的な状態を示してこのように文字を呑み込むと、神力を体に入れて難産の状態を安産の状態に変えられるからだ<sup>(32)</sup>。文字を分解するのは、物の名前のなかに物の性質も存在するという仏教の考え方に起原がある<sup>(33)</sup>。これは名詮自性（みょうせんじしょう）という方法で、部分的に密教の十三仏に関する思想から広まって神仏の名前の字や神聖な所の名前の字を分解したが、このことは、この世の現実とあの世の現実をつなぐことで俗化され、妊娠の慣習にも影響を与えるようになった。

書いた文字を呑み込む慣習は上記の技術に限らず、儀式化の感性和妖術の感性を表現する儀式のパターンを形成した。妊娠についての他の例は血盆経に基づいた儀式である。難産を防ぐために妊婦は最初にお腹と腹帯の間に血盆経を置く。色々な改訳があるが、血盆経は子を産んだ女性が血の不浄のせいで血の池の地獄で罰を浄めることについての苦しみを述べるものとして有名であり、江戸時代になると妊娠だけではなくて生理という血の不浄も含むようになった。その地獄で苦勞する運命から身を守り、難産を防止する懸念は体に経を置く慣習に影響を与えたかもしれない。さらにこの慣習は、産後、母親が経から地藏菩薩の名前の文字を切り抜き水で呑み込むことへと続く。後に、元気を保ち続けるのに二番目の経を貰ったそうである<sup>(34)</sup>。伊勢の文字を呑み

込むように地藏菩薩の文字を体に入れる儀式の実行により、女性は体の中に神聖な力を入れて直接体の状態や魂の運命を改善できる。

食物の選択や産婆の技術、神聖な力をもたらす文字にもかかわらず、尚、難産は死が母親にも胎児にも迫ってくるものとされる。死の影の前では、儀式の環境としての体は単なる体にすぎないとされた。一番の危機的な状況は子宮内で胎児が死ぬということである。子はすでに死んだけれども、その子は母の体から取り去られ母の命を助ける挑戦が残されるのであり、これはすなわち、母親のために恐ろしい難産を“安産”に変える挑戦だと言える。これは主として母に胎内を刺激する薬を処方して投与する。苗村によれば胎児の死の徴候は母親の舌が黒くなることであるが、1693年に出版された『救民妙薬』では腹が痛いことが胎児の死の徴候であり、さらに鹿の角の一部を黒くなるまでよく焼いて酒で母に呑み込ませるという薬を勧めている<sup>(35)</sup>。同様に苗村も「鹿の角のくろやきを酒にて用ゆへし」という処方薬を挙げ、また他のものとしては、雄の麝香鹿の乾燥した麝香の分泌腺の細長い部分をクスノキの皮と合わせて碾いて粉末にし、酒で母に飲ませることがある<sup>(36)</sup>。両方とも胎内を刺激して死んだ胎児をおろさせることになり、苗村はこの出産の成果を次のように「そのまゝむまるゝなり」と書いて婉曲的に表現した<sup>(37)</sup>。

## おわりに

『女重宝記』のような女訓を読むと、徳川時代には、妊婦の体が胎児が成長する環境を備えている間、儀式の実践がおこなわれる環境を備えていたことがうかがえる。儀式は、人を新しい状況に適応させる力を持ち、人が知覚する現実を変化させる力を持っている。儀式によって妊娠が生物学的な現実から希望と懸念に満ちた社会的な現実へと変化する。病気になりやすく妊娠中に多くの女性が死ぬ時代では、妊婦の体から危機を防ぎ悪いことが起こる理由を釈明できる理想的な環境を作ろうとした。この力を使用して女性や家族、産婆は、妊娠という新しい状況を確認して祝ったり妊娠のさいの脅威的な状況から母親と子を保護したりして、妊娠の希望と懸念を統制しようとした。このように、死や障害という意味も新生児や家を継ぐという意味も含む妊娠は、ケガレとハレの境でさまよう体験に基づいた現象だと言える。それゆえに、妊娠に関する儀式はその境でさまよう妊婦の体を、懸念をもたらすケガレの側から希望をもたらすハレの側へ動かせようとする人間の行ないである。死と生、不安と安心、不幸と幸運の境の一つの側から他の側へ導こうとする儀式を備えることによって、『女重宝記』は女性の人生の手引書として本当に意図に添ったものといえる。

## 註

(1) Ochiai (1999), 197 - 201

(2) 儀式に関するこの考え方は、ジョナサン・スミスという宗教学者による儀礼研究に対する(1980)と、古代近東の宗教研究についての分板(1987)に基づいている

(3) 國本(1996), 157

- (4) 江馬 (1971), 96
- (5) Hendry (1996), 287 - 303
- (6) 苗村 (1692), 132 - 136
- (7) 三谷 (1977), 197
- (8) 沢山 (1990), 146
- (9) 苗村, 58 - 59
- (10) 苗村, 65
- (11) 中村 (1990), 23 - 36
- (12) 中村, 29
- (13) 細くて鋭いものとは、長い箸や大麦の茎などである。そのような中絶の方法については桜井 (1993) と杉立 (2002) を参照のこと。
- (14) 有馬と西垣 (1990), 4
- (15) 有馬と西垣, 4
- (16) 寺島 (1712), 194
- (17) 苗村, 66
- (18) 苗村, 62 - 63
- (19) 幕末の母親が書いた日記に見られる子供の病気については皆川 (1998), 148 - 168 を参照のこと。
- (20) Meigs (1997), 97
- (21) 宮田 (1981), 19 - 20
- (22) 苗村, 63
- (23) 有馬, 若杉, 西垣 (1989), 99
- (24) 苗村, 63, 65
- (25) 苗村, 74
- (26) Grimes (1982), 34 - 52.
- (27) 江戸時代の養生の原則と実行については安藤 (2005) を参照のこと。
- (28) 苗村, 73
- (29) Hardacre (1997), 23 - 24
- (30) 苗村, 72 - 73
- (31) 苗村, 73
- (32) 苗村, 73
- (33) 中村, 26
- (34) 血盆経の歴史と本文の変化について、とりわけ江戸時代との関係についてはTakemi (1983), 229 - 246 を参照のこと。
- (35) 有馬, 若杉, 西垣, 138

(36) 苗村, 74

(37) 苗村, 74

## 参考文献

### 和文

有馬澄子 西垣賀子 1990

「江戸期女性の生活に関する研究—『女重宝記』にみる出産と病気」『東洋学園女子短期大学紀要』 第25号

有馬澄子 若杉哲男 西垣賀子 1989

『女重宝記 下 注解編』 東横学園女子短期大学女性文化研究所

安藤優一郎 2005

『江戸の養生所』 東京 PHP新書

江馬務 1971

『結婚の歴史』 東京 雄山閣出版社

作者不明 1650

『女鏡秘伝書』『江戸時代女性文庫』 第34号 東京 大空社 1995

香月牛山 1692

『婦人寿草』『江戸時代女性文庫』 第29号 東京 大空社 1995

國本恵吉 1996 盛岡市 タイムス社

『産育史—お産と子育ての歴史』 盛岡市

桜井由幾 1993

「間引きと墮胎」『日本の近世』 第15号 東京 中央公論社

沢山美果子 1990

「近世農民家族の産の風景」『順正短期大学紀要』 第19号

杉立義一 2002

『お産の歴史』 東京 集英社

寺島良安 1712

『和漢三才圖會』上 東京 美術 1970

苗村文伯 1692

『女重宝記 上 本文編』 東横学園女子短期大学女性文化研究所 1989

中村一基 1990

「『胎内十月の図』の思想史的開展」『岩手大学教育学部研究年報』 第50号

穂積甫庵 1693

『救民妙薬』『日本教育文庫』 東京日本図書センター 1979

皆川美恵子 1998

「近世末期の『桑名日記』『柏崎日記』にみられる養育文化」『文化と女性－日本女性史論集』第7号 吉川構文館

三谷一馬 1977

『江戸吉原図聚』東京 立風書房

宮田登 1981

江戸歳時記 東京 吉川構文館

## 英文

Grimes, Ronald L. 1982

*Beginnings in Ritual Studies* Washington D.C.: University Press of America

Hardacre, Helen 1997

*Marketing the Menacing Fetus in Japan* Berkeley: University of California Press

Hendry, Joy 1996

“The Sacred Power of Wrapping” *Religion in Japan: Arrows to Heaven and Earth* Cambridge: University of Cambridge Press

Meigs, Anna 1997

“Food as a Cultural Construction” *Food and Culture: A Reader* New York: Routledge

Ochiai, Emiko 1999

“The Reproductive Revolution at the End of the Tokugawa Period” *Women and Class in Japanese History* Michigan Monograph Series in Japanese Studies 25 Ann Arbor: University of Michigan

Smith, Jonathan Z. 1987

*To Take Place: Toward Theory in Ritual* Chicago: University of Chicago Press

Smith, Jonathan Z. 1980

“The Bare Facts of Ritual” *Journal of the History of Religions* 20

Takemi, Momoko 1983

“Menstruation Sutra’ Belief in Japan” *Japanese Journal of Religious Studies* 10